

# FUEKI

特集 福武純子理事長就任記念[対談]  
財団が果たす 地域社会への役割











助成対象者にはさまざまな人がいます。地域でユニークな活動をしている人、伝統や歴史を掘り起こしている人、地域資源に新しい価値をみつける人。この「FACE」ではそんな人々に会いに行きます。

## 「地域のなかでアートを考える」

児島半島の先端の下津井に館長や学芸員がいない小さな美術館「吹上美術館」が2015年春にオープンしました。美術館の管理運営だけでなく、展示の内容や企業とのコラボレーション企画などを担っているのは、地元の若者3人が立ち上げた一般社団法人クリエイターズラウンジ。代表を務める片山康之さんに美術館を始めた思いを伺って来ました。(和田広子)

児島に住んで30数年という片山さんは、倉敷芸術科学大学で彫刻を学び、2008年には29歳で日展特選を受賞、新進彫刻家として注目されました。その後もアートフェアに参加したり、美術館やギャラリーで個展したりと活躍する一方で、児島で暮らすアーティストとして地域の中で何ができるのかを考え始めたそうです。

まず、作家集団クリエイターズラウンジを立ち上げて座談会や展示会、ワークショップなどを企画し、作家と地域をつなぐきっかけづくりに取りかかりました。3年ほどたち、そろそろ自分たちの「場」が欲しいなと思っていたところ、旧荻野美術館の活用を考えてほしいと地元の方から声がかかりました。「最終的に美術館に決めたのは、元々美術館だったということも大きいですが、まわりの反応がよかったし、面白そうだったから。機能のリノベーションです」と片山さん。

知り合いのアーティストの作品を「のんびりとみせていくつもり」で始めましたが、企画やグループ展、ワークショップやトークイベントなどスケジュールは来年まで決まっています。美術館に関わってくれる人は、地元の大学や学生、企業やホテルなどにも広がり「思った以上に大変だけど、思った以上の手ごたえを感じている」そうです。

「吹上美術館は地域との関係を、人と人との交流だけで考えるのではなく、モノや場所、資源や風土、歴史とも関わり合うべきだと思っています。最近では関係性を問うようなアート作品も多いですが、アートの中でアートを考えるのではなく、地域の中で、アートってどういう意味があるのかを考えていきたいと思っています。そのためには、地域の特性をつかむ時間が必要だけど、そこは既につかんでいると言わせて欲しいです。ずっと児島で暮らしてきましたから」

オープニングは8名の作家による「Artists」を開催。期間中は作家のレクチャーや出張喫茶などを企画。今後は美術館として作品の収蔵もしていきたいと考えているそうです。

地域が支えていく美術館は、美術館としての役割の他に文化や教育、観光や産業とアートが交差する拠点となるための取り組みが始まっています。



一般社団法人クリエイターズラウンジ代表

片山康之

吹上美術館 <http://fukiage.jp/>

### 高本敦基展 — 並置思考 —

2015年7月25日(土)～10月25日(日) 有料

◎レクチャー Vol.2

渡邊義孝×山口晋作

『空き家の活用～尾道と下津井～(仮)』

10月3日(土) 有料

片山康之(かたやまやすゆき) / 彫刻家

1978年生まれ。倉敷芸術科学大学大学院芸術研究科美術専攻修了。岡山県美術展山陽新聞社大賞(2008)、岡山芸術文化賞準グランプリ(2009)、マルセン文化賞(2009)。吉備高原学園高等学校講師。2010年からクリエイターズラウンジ(2014年から一般社団法人)の活動を始める。倉敷市児島在住。

## 国吉康雄の絵は 自分の人生を、 大なり小なり考える契機

岡山大学大学院教育学研究科国吉康雄講座 准教授  
クニヨシパートナーズ ディレクター

才士真司

—なんてこという人が、年齢・性別問わず、結構いるようだ、この3年、岡山で様々な仕掛けたイベントや国吉の取材でわかってきた。それでちょっと、昨年の国吉祭のアンケートに、「国吉のナニに惹かれる?」という問いをたて、答えを次から選んでもらった。

『画風・色・人生・生きた時代』

正直を言うとこれ、僕が国吉に惹かれる理由。ただ、アンケートの結果って、どこかにまとっちゃうかなと思っていただけ、結果、それぞれが等分に票を集めていた。まあ、国吉を気にしたきっかけというのは鑑賞者それぞれで、国吉の絵は、向き合った個々にアプローチをしているってことなんだろう。確かに僕は、じっと国吉の絵に魅入る、たくさんの人たちの姿をみてきた。つまり、国吉の絵には人々の興味を誘導する様々な仕掛けがあるんじゃないかと。それは、スミソニアンで開催されている国吉の回顧展とかの反応を見ても思うことだから、国籍とかも関係ないんだと思う。

国吉の絵に描かれたモチーフや色彩、詩的で哲学的なタイトル、描かれた時代。こういったシグナルに気づいたら、国吉の絵の前に立つ鑑賞者は絵の観察者へと変化する。30秒程度だといわれる美術館での1枚の絵の前での滞留時間は難なく破られ、絵

に向けていた箭の問いが、いつのまにか自身へ向けられていた…なんてことがままある。

こういう面白さが国吉の絵の効能なんじゃないかと改めて考えると、「どうしてそんなことになるんだ」と、またうまく説明できない問いが入れ替わりにたってしまう。

そんな話を色んな人にしていたら、「それ、研究してみようよ」という話があった。つつ、この効果を最大限に活かした美術鑑賞教育プログラムを開発し、教育の場や美術館で実践してみてもどうかと。これが、岡山大学教育学部での国吉康雄研究室設置に至る、あるひとつの経緯で、研究すべきプロジェクトのひとつ。こういう研究の成果とかシェアできれば、国吉の絵を通して物事を深く、かつ複合的に考える思考法を身につけることができるんじゃないかなと。どうでしょう。

国吉康雄の新たな活用法とそれを研究、実践していこうという、岡山大学の国吉康雄研究室の活動に興味を持っていただけでしょうか?

そうだと、嬉しいな。

※クニヨシパートナーズ  
岡山での国吉康雄顕彰活動及び研究活動を企画、運営、管理するために出石町(岡山市)の各団体が参加して設立した団体



国吉康雄回顧展の準備の様子(スミソニアン美術館)

## お客様は神様 ————— 杉浦慶侓

日本舞踊の舞台を初めて観てきました。

お目当ては花柳大日翠さん。30代前半という若年ながらもめまぐるしく活躍をされている、舞踊の世界では知る人ぞ知る有名人なのです!……と知ったかぶりをしておりますが、私はそれまで日本舞踊の舞台など観たことがありませんでした。

なぜなら三味線や鼓を伴奏に、袴姿に扇子で踊る古典的で難解なイメージ。実際パンフレットの解説文であらかじめストーリーを頭の中に入れ、いまがどの場面かを時折耳で聞き取れる言葉の端と身体の動きで読み取るのがやっと、という感じでした。

では結論として、公演がつまらなかったのかといえばそうではありません。舞台の上には満員御礼の客席の視線を一手に引き受けて舞う、花柳大日翠がいました。

水を打ったように静まりかえる会場。その中でひとり踊り続ける様はまるで巫女のそのようで、エンターテインメントを通り越してなにか神秘性さえ帯びていました。

そもそも「舞」の発祥には諸説ありますが、ひとつには神に捧げる祈りとしての行為があります。先日の舞台で感じたのもそんな何か大きなものへと自らの身を捧げる、ひたすらに純粹で透明な魂の力強さでした。

会場で配布されたチラシによると毎月のように舞台が控えています。彼女は蓄積する疲労と闘いながら、満身創痍で踊り続けているのです。翻ってそれはどんな舞台にも一切手を抜かない演者としての真摯な姿勢の証でもあります。

どうやら彼女が心おきなく休息をとれる日はまだまだ先になりそうです。きっと神様さえもが彼女の舞をもっと観ていたいに違いないからです。

すぎうらけいた / 写真作家 1980年岡山県生まれ、津山市在住。平成17年に津山市へ帰郷して以来、活動拠点を地元・津山とし、自然と人間の関係をテーマに制作を続けている。2008年「GEISAIMUSEUM#2」、ウィクターピンチェック賞、「GEISAI#1」銅賞 / 2009年「I氏賞選考作品展」大賞 / 2010年福武文化奨励賞



写真の人 花柳大日翠

はなやぎおおひすい / 日本舞踊家 1984年岡山市生まれ。幼少の頃より日本舞踊の稽古に励み、日本舞踊の五大流派の一つ花柳流全門弟代表の人間国宝・花柳寿南海に師事し、現在最も飛躍が期待されている若手日本舞踊家の一人。若手日本舞踊家で構成する「藝〇座」(げいまるご)の同人となり、古典のみならず時代性を盛り込んだ創作舞踊にも挑戦し、自己研鑽に努めている。2014年福武文化奨励賞。

## Editor's Column

▼6月の役員会で、福武總一郎が理事長から名誉顧問に、前副理事長・福武純子が理事長となり、その後任として松浦俊明が副理事長を務めることとなりました。新理事長、副理事長を迎え事務局には新しい風が吹き込まれています。対談(p2~5)では理事長としての思いを語っています。皆さまの「いいね」がたくさんいただけるような財団にしていきたいと思えます。▼8月4から10日までアメリカ・ワシントンのスミソニアン美術館に行ってきました。目的は、もちろん「国吉康雄大回顧展」をみるためです。ニューヨークタイムズも取材に来たこの展覧会は、注目され、好評を博しました。今後様々なかたちで行なわれる国吉康雄に関するイベントにご注目ください。

機関誌

不易

F U E K I vol.58 2015.10.1 (次号は来年1月25日発行)

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

編集・発行:

公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17  
株式会社ベネッセコーポレーション本社3F  
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190  
URL <http://www.fukutake.or.jp/>  
E-mail [eczaidan@fukutake.or.jp](mailto:eczaidan@fukutake.or.jp)

制作:  
株式会社 吉備人  
デザイン:  
田中雄一郎(QUA DESIGN style)  
印刷:  
広和印刷株式会社